

2017年2月26日聖学院教会聖日礼拝説教

「罪に死す」

ローマの信徒への手紙6：1－14

菊地 順

前回のローマの信徒への手紙の説教では、5章に記されているキリストの従順についてお話をしました。すでに5か月前のことですので、あまり覚えておられないかもしれません。アダムの不従順によって罪がもたらされたのに対し、キリストの従順によって神の義がもたらされたことを学びました。それは、キリストを受け入れる者は、罪人であるにもかかわらず、キリストの従順によって義とされ、新しい命に生きるということでした。そして、そのとき、5章の20節に記されている、「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」というパウロの告白の言葉を味わいました。それは、律法によって罪の自覚が増せば増すほど、キリストの贖いの恵みが一層強くパウロの胸に迫ってきたことを告白するものでした。そして、今日の話は、そのパウロの告白を受けての話になっています。すなわち、6章1節では、こう語り出されています。「では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか」。パウロが語った、「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」との告白に対し、おそらく、そういう応答が返ってきたのだと思います。罪が増したところに、恵みがなおいっそう満ちあふれたのであるならば、その恵みに与るために、一層のこと、罪にとどまっていた方がいいのではないか、そういった開き直りとも言える反応が返ってきたのです。それに対し、パウロは、即座に、「決してそうではない」と断言しています。そして、「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう」と反問しています。パウロは、恵みにとどまるために、一層の事、罪にとどまった方がいいと開き直る輩に対して、わたしたちは罪に対して死んだのだと言うのです。そして、死んだ以上、罪の中に生きることができないと断言するのです。

今は、ちょうど大学入試の時期です。合格すれば「桜咲く」、不合格になれば「桜散る」季節です。咲くか散るかでは雲泥の差があります。それこそ、合格すれば、天にも昇る喜びではないでしょうか。それは、長い人生においても、めったに経験することはできない貴重な喜びです。しかし、だからと言って、もう一度受験生時代に戻りたいと思う人はいないのではないのでしょうか。大学合格の喜びを味わいたいから、もう一度受験勉強の苦しい生活をしたいという

人はまずいないと思います。そして、何よりも、合格すれば受験生活は終わるのです。目的を達成すれば、その生活は終了するのです。言ってみれば、死を迎えるのです。そして、死とは、覆すことのできないものなのです。受験生活と罪の生活とは、非常にかげ離れた話ではありますが、その生活が終わる、死を迎えるということでは、同じだと思います。そうした死について、パウロはここで語ろうとしています。

パウロは、3節で、改めてこう語り出しています。「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを」。すなわち、パウロは、ここで洗礼の話をするのです。そして、洗礼とは、何よりも死を意味することだと語るのです。ところで、「あなたがたは知らないのですか」とここで語り出されていますが、「知らないのですか」ということは、ある程度知っているということを前提とした言い方でもあります。ということは、洗礼はすでに教会に定着していたわけですから。そして、それをパウロも継承していたわけですから。この手紙が書かれたのは50年代だと思われませんが、主イエスの死後、20年ほどしか経たない教会で、すでに洗礼も、また毎週朗読されているように、聖餐も定着し、継承されていたのです。そして、パウロもそれを継承していたのです。しかし、その意味は必ずしも十分には浸透していなかったのかもしれない。そこで、パウロは、改めて洗礼の意味を語ることになったのです。

ここでパウロは、少し長々と洗礼について語っていますが、それはおおよそ3段階に分けた話になっています。まず4節で、パウロはこう語ります。「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」。ここでパウロは、改めて、洗礼によって、わたしたちはキリストの死に与ったというのです。元々のギリシャ語に立ち帰ると、「洗礼」(バプティスマ)という言葉は、洗礼を授けるという「バプティザー」βαπτίζωという言葉に由来しています。そして、このバプティザーというギリシャ語の元々の意味は「水に浸す」という意味です。そして、そこから「浸して清める」とか「洗う」という意味が生じています。またこの言葉には「入浴する」という意味もあります。新約聖書では、その多くが洗礼を授けると訳されていますが、たとえば、マルコによる福音書7章4節では、身を清めるとか、洗うという意味で訳されています。その箇所はファリサイ派の習慣(言い伝え)について言及したところですが、こう記されています。ファリサイ派の人たちは、「市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある」。この「身を清める」とか「洗う」と訳されているのが、どちらもバプティザーという言葉です。ですから、ユダヤ教の時代からすでに「洗礼」に先立

つ習慣があったとも言えます。しかし、それが特別の意味を持つようになったのは、やはり洗礼者ヨハネからであると言えます。それは、罪の「悔い改め」のしるしであり、従って、それは古い自分に死ぬことともなったのです。また一説によると、当時の人々は、死者の国は水の下にあると考えていたようで、そのため水を潜（くぐ）ることは、死ぬという象徴的行為となったとも言われています。いずれにしても、バプティスマ、「洗礼」というのは、単に身を清めることではなく、死を意味することとなったのです。

しかし、それはまた、新しい命に生きるためでした。パウロは、4 節後半で、「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」と語っています。それが洗礼の第 2 の段階です。キリストと共に死ぬということは、キリストと共に生きることだとパウロは語るのです。しかし、それはもちろん、文字通り生物的に死に、そして生きるということではありません。それは、あくまでも、信仰的に死に、そして生きるということです。そのことは、たとえば言えば、アスリート（スポーツ選手）とコーチの関係のようなものではないかと思います。アスリートが、優れたコーチとの出会いを通して格段と力を伸ばしたとします。そうすると、このアスリートは、このコーチに弟子入りし、このコーチの教えを守り、このコーチと共にメダルを目指すことになるのではないのでしょうか。それは、言ってみれば、そのコーチに命を預けることです。もっと言えば、そのコーチの指導に死に、そして生きることです。そのようにして、アスリートとコーチは一心同体となって行きます。パウロは、5 節でこう語っています。「もし、わたしたちがキリストと一体となってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう」。パウロは、キリストと一体となることによって、わたしたちも、もはや死に支配されない復活の姿にあやかることができると語るのです。それが、新しい命です。それは、死や絶望に支配されない命です。優れたコーチに出会う前のアスリートは、失敗と絶望の繰り返しの生活であったのではないのでしょうか。しかし、優れたコーチに出会って、その指導に身を委ね、その指導に死んだとき、そうした古い生活にも死んだのです。そして、そのアスリートは、コーチと共に生きる中で、絶望ではなく、希望を持って、新しい選手生活に取り組むことができるようになるのです。そのようにして、新しい命に入れられるのです。そのようにパウロは、わたしたちも、キリストと一体となることによって、復活の姿にあやかることになるのだと語るのです。

さらにパウロは、6 節と 7 節でこう語っています。「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は、罪から解放されています」。パウロは、「死んだ者は、罪から解放されています」と語るのです。

す。これが、洗礼の第 3 の段階です。アスリートが、優れたコーチと出会い、古い選手生活に死に、その生活を支配していた絶望から解放されるように、キリストと共に古い自分に死ぬことは、古い自分を支配していた罪から解放されることでもあるのです。そこには、死と命、絶望と希望という明確な区別があります。そうした全く新しい命へと招き入れられたのが、キリスト者なのです。そしてパウロは、その救いの出来事を、8 節で、改めて端的に語っています。すなわち、「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」。パウロは、キリストと共に死んだなら、キリストと共に生きると信じます、と語るのです。そして、キリスト共に生きるとは、9 節にあるように、「死者の中から復活されたキリスト」と共に生きることであり、それは復活の命に与ることなのです。パウロは、そのことを「信じます」と語るのです。「信じます」とは、信仰告白です。パウロは、キリストと共に死んだなら、復活されたキリストと共に生きると信じると告白するのです。そして、この「死んで復活した命に生きる」ことこそが、「洗礼」ということなのです。

しかし、それはまだ、完全にわたしたちの手にはしていません。それは、約束されているものです。ちょうど、優れたコーチに出会ったアスリートが、そのコーチと共に生きる中で、メダルを目指して、その希望に生きるように、それは希望に生きることです。しかし、それは、古い自分から見れば、雲泥の差ではないでしょうか。罪の絶望の中で生きていた者が、その罪から解放されて、希望に生きることができるということは、正に死んでいた者がよみがえることではないでしょうか。哲学者のキルケゴールは、絶望こそ、死に至る病であると語りました。そうであるならば、絶望から解放され、希望に生きるとは、正に死からよみがえることであるといっても過言ではないのです。そうした命、希望を、わたしたちはキリストと共に古い自分に死ぬことによって与えられているのです。だから、元に戻ることはできないのです。また戻ってはならないのです。

ただ、残念ながら、わたしたちはまだ肉の存在です。罪を宿している肉は、まだ健全なのです。わたしたちは、信仰によって、キリストの死に招き入れられました。そして、解放を味わいました。しかし、その完成は、まだ先なのです。メダルを手にすることができるのは、先の事なのです。そのためパウロは、最後に勧告を語っています。12 節以下でこう語っています。「従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい」。パウロは、自分自身を神に

献げなさいと勧告します。しかし、それは、あくまでも穏やかな勧告であると言っていると思います。それは、すでに洗礼の恵みに与っている者たちに対して語られているからです。そのためパウロも、最後の14節で、「罪は、もはや、あなたがたを支配することはない」と語り、またそれゆえに「あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです」と改めて語っています。

わたしたちは、すでに恵みの下にいるのです。キリストと共に死に、キリストと共に生きる恵みの下にいるのです。それは、絶望ではなく、希望に生きる恵みです。それを、わたしたちは、洗礼を通して与えられているのです。ですから、洗礼を受けたということは、伊達に受けたということではないのです。それは、決して形だけのものではないのです。それは、何よりも、わたしたちに先立って歩まれ、導かれる主イエスの命に、信仰を通して与ることなのです。信仰を通してキリストと一つとされ、キリストの復活の命に与ることなのです。それは、死の脅かしと不安から解放された命です。そこには、もはや死もなく、悲しみも労苦もないのです。そうした永遠の命に、洗礼を通して、わたしたちは招かれているのです。その恵みを、今朝は、深く心に留めたいと思います。